

---

# Fantastic Syndrome

麻生柚葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fantastic Syndrome

### 【Nコード】

N5763M

### 【作者名】

麻生柚葉

### 【あらすじ】

甘い香りに誘われてようこそ夢の世界へ。  
とある旅人が夢に捕らわれ、夢に夢を見て、夢に焦がれる。  
沢山の夢の住人の夢を見て、彼は一体何処へ行き着くのか。

## 01 始まりの夢

不思議な香りに誘われ、旅人はどうやら森に迷い込んでしまったようです。

見渡す限りの沢山の木々に旅人は首を捻ります。  
一体いつの間に森に入ったのでしょうか。  
前後の記憶が霧がかかったようにはつきりしません。

思い出せるのはこの甘い甘い香りだけ。  
木々の匂いは不思議とせず、森に漂うのは甘い甘い香り。  
この香りに誘われた気がします。

ふと、旅人の視界に綺麗な青色が入りました。  
鬱蒼と茂るどこか暗い印象を受けるこの森には不釣り合いなイメージを受ける一人の可憐な少女。  
だけれど、不思議と違和感を感じませんでした。

一人佇む少女に旅人は言いました。

「どうやらこの森に迷い込んでしまったらしいんだ。  
ここが何処だかきみはわかるかい？」

ここはそう“有り得ない”場所

少女の口から聞こえたはずの声は静まり返った森に響き、別の場所から聞こえてくるようで

「有り得ない」・・・場所？」

そうだよ。迷い込んだ旅人さん。あるはずがないんだよ。

謎かけのような言葉を旅人は理解できません。  
クスクスと少女の声が響きます。

「ならば、“有り得る”場所に案内してもらえないかい？」

旅人が言うと少女はそのガラス細工のような大きな目を細め、面白そうに旅人を見ました。

そして森の雰囲気似合わないほど、無邪気に柔らかに笑いました。  
少女が笑うたびに強くなっている気がする甘い香りに眩暈がします。

旅人さん。今回は特別だよ。出口まで連れて行ってあげます。

小指を出して少女は言いました。

だけど、この先森を抜けても絶対に私の事を私の森を忘れない  
てください。

ね？約束ですよ。そうしてもう一度会いましょう。

少女の強い瞳に気圧されたのでしょうか、どこか怖いと感じる思い  
に反して首は頷いていました。

そして・・・

触れた指先の冷たさがやけにリアルで旅人は夢から覚めました。

誘いはドルチェ

残った“モノ”はむせ返る様な薔薇の匂い

果たして旅人はもう一度少女に会うのでしょうか・・・？

01 始まりの夢

旅人さん・・・

少女の小さな呟きは誰に聞こえる事も無く風に乗って消えていった。

## 02 明晰夢

白い白い白い

真っ白な場所、空間とも言える場所に旅人は立っていました。

白い白い白い

あまりの白さが眩しくて、瞳を閉じてても白く染まっている様な気がします。

寂しい空間。何か色があれば良いのにと旅人は願いました。

すると突然に黒い風が吹き、風圧に負けて尻餅をつくと赤い水に落ちました。

驚いて回りを見渡すと黄色い珠が浮かび、藍色のリボンが視界を覆いつくします。

そして白が全て飲み込まれ旅人が恐怖を感じる前に、それは逆に白に飲み込まれました。

何事も無かったかのように、空間は白に戻ります。

それは、とても駆け足であったという間の出来事でした。

「また・・・だ。」

この空間に来るのは初めてだけれど、この不思議な感覚。  
どうしてここに居るのか思い出そうとしても、前後が曖昧になる記憶。

ああ、これは“夢”？

そうだ、旅人。貴様の考えている事は正しい。

いきなり背後から聞こえてきた声に飛び上がりながらも旅人は振り返りました。

これは“夢”。貴様の見る夢。全てが貴様次第の・・・な。

一体いつから、いつの間に・・・旅人は開いた口が塞がりません。  
声を出すことも忘れ、立ち上がることも忘れ、呆然と見上げるばかりです。

・・・旅人。思い描け、そして思考を止めるな。

旅人の驚きを他所にどこか懐かしむ様な目をして白を身に纏う青年が言います。



でないと、でないと・・・

ごくり。

静かな空間に旅人の唾を飲む音がやけに大きく響きます。

俺が存在できない。消えてしまう・・・よ。

無表情な顔とは裏腹に響くテノールは儚く消えて溶けていく様でした。

そして青年も空間と同化する。

澄んだ色をどうか濁らせて

白だと思っていた空間は本当は何も無い透明だった

“彼”について考えた時にはもう全てが消えてしまっていた

02 明晰夢

考えて想像して思い描いて。どうか俺に色をください

旅人にその声はもう届かない。

### 03 白昼夢

ほうら！見てくださいよ。旅人さん旅人さん！

長いスカートをヒラヒラ翻して彼女は舞う様にはしゃいでいます。

「そんなにはしゃいでいると転んでしまうよ。」

彼女の子供っぽさに苦笑しつつも、太陽のように笑い、キラキラ輝いて光る金糸が綺麗だ。なんて柄にも無く思う。

そんな事を言っている傍から、彼女は派手に転んでしまいました。

うわーん、痛いですよー。旅人さん旅人さん。

「ほうら、言わんこっちゃない。」

お約束な展開に呆れながらも旅人は手を差し出します。

ふと、合わさった上目遣いの彼女の瞳が怪しく光った様に旅人は感じました。

まるで見てはいけないものを見ている様で背筋が凍ってしまいそう。今までの彼女は何処に行ったのか、別人の様に感じてしまうなんて妹のように愛してきた彼女に恐怖を感じてしまうなんて

ねえ、旅人さん旅人さん。私と一緒に・・・

言いようの無い不安感が体中を駆け巡り、体中から警報が聞こえます。

これ以上は後戻りが出来なくなってしまうようで・・・

ねえ、            こんな            キミ            は            シラナイ            よ

バチンっ！

突然の音に旅人はハッと我に返りました。  
どうやら、彼女が目の前で手を叩いた様です。

よくよく彼女を見るとはしゃいでは居るけれど、転んだ形跡はありません。

ああ、助かった。何て悪い夢だったんだ。  
相変わらずの彼女を見て思わず、小さくひとりごちました。

何も知らない彼女は固まったままの旅人に怪訝そうに見ています。

「あつ、ああ、すまない。少しボーっとしていたみたいだよ」  
そういつて微笑んだけどちゃんと笑えていたでしょうか。

続きの言葉は聞きたくないよ

普段通り綺麗に微笑む彼女に少しホッとしただなんて

気を取り直して、旅人は先を急いだ

03 白昼夢

あー、待って下さいよお！

ねえ、旅人さん旅人さん。気を抜いたら引きずり込まれますよ。ふ  
ふふっ

後ろから追いかける彼女の笑いに含まれたモノに気付くのは誰も居  
ない。

## 04 逆夢

しくしく、シクシク

誰かが涙する音が聞こえます。

ドンドン、ドンドン

誰かが壁を叩く音が聞こえます。

一人の子供が手を赤に染めながら必死に壁を叩いています。

白い壁がどんどん赤に染まっていきます。

痛さなど忘れたかのように真剣な表情で何かをを叫び続けています。

旅人は言います。

「どうして、そんなになるまで壁を叩くんだい？」

僕の声はいつだってあの子に届くことはないけれど、あの子がそこに居る。

大粒の透明な涙を流しながらその子は答えます。

「この壁の向こうに誰か居るのかい？」

何処までも続いていそうに聳える壁が、拒むように立ちはだかつて邪魔をしていました。

もう一人の“僕”が居るんだよ。

旅人はその子の言う事が半分も理解できませんでした。  
分ったことは壁の向こうにあの子が居るということ。

ならば、

「ならば、壁を壊すのを手伝おう」

壁を壊してしまえとどうしてそんな事を思ったのか旅人には分かりません。

どう見ても壊れそうも無い壁なのにどうしてそんな事を言ったのか旅人は分かりません。

痛々しいその子を見ていらなかったのかもしれません。  
その子に何かを重ねていたのかもしれません。

だけれど、どうしても壁を壊さないといけないような気がしたので  
す。

本当に？嬉しい

目を真っ赤にしながらその子は笑いました。

旅人は、とりあえず壁を叩いてみることにしました。

すると、そこまで力を入れた訳でもないのにその子がどんなに叩いても壊れなかった壁が呆気なく崩れ落ちて行きました。

「どうし・・・て？」

思わぬ出来事に旅人は目をこすってしまいました。

しかし、変わらずそこには崩れ堕ちた壁がありました。

瓦礫の向こうにその子と似たようなあの子が居ます。  
嬉しそうに二人して駆け合い抱き合う瞬間がまるでスローモーションのように流れ、旅人の目に焼きついて離れなかった。

その子があの子の名前を叫んだ。

逆さま、届かなかった僕の声

その声はノイズがかかった様に聞き取ることが出来なかった

赤と涙でぐちゃぐちゃになった“あの子”が笑った

04 逆夢

ありがとう。ありがとう。 壁を壊してくれて ありがとう  
とう

ふわりとその子の大きな黒いリボンが揺れた。



## 05 正夢

しくしく、シクシク

誰かが泣く音が聞こえます。

ドンドン、ドンドン

誰かが壁を叩く音が聞こえます。

白く聳え立つ壁に一人の子供が手を赤に染める子供  
どうしてだろう、酷く既視感を感じる。

あの子は初めて見る子なのにどうしてなんだろう・・・

「どうして、そんなになるまで壁を叩くんかい？」

その子の声はいつだって僕に届くことはないけれど、その子が  
そこに居る。

僕の声はいつだってあの子に届くことはないけれど、あの子が  
そこに居る。

大粒の透明な涙を流しながらあの子は答えます。

「この壁の向こうに誰か居るのかい？」

何処までも続いていそうに聳える壁が、拒むように立ちはだかつて  
邪魔をしていました。

もう一人の“僕”が居るんだよ。  
もう一人の“僕”が居るんだよ。

重なる重なる。頭が痛い。

旅人はあの子の言う事が半分も理解できませんでした。  
分ったことは壁の向こうにその子が居るということ。

ならば、

「ならば、壁を壊すのを・・・」

出て来た言葉は無意識で、壁は壊れると思いました。  
だけれど、どれだけ壁を叩いても聳え立つ壁はびくともしませんでした。

叩いても叩いても手に残るのは痛みだけで壁に傷一つつける事が出来ません。

どうして、どうして、あっちの壁を壊したの・・・！

どうして、どうして、どうして！！

悲痛な叫びが旅人を攻めました。

訳が解らない。

ああ、頭が痛い。

耐えられず、視界が暗転して倒れるのがスローモーションのように感じました。

薄れる意識の中 赤と涙でぐちゃぐちゃになった 見たことの無い  
“その子”が 泣いた のが見えた気がした

もう一人の僕は何故こんなに近くて遠い  
手のひらから零れ落ちた僕の想いはカタチを変えてしまったんだよ。

僕は君にどうしても届くことが出来ないんだ

05 正夢

あいたい。あいたい。近くて遠い、同じで違うもう一人の“僕”  
ただ、会いたい

届くことの無い言葉は無機質な壁にぶつかって壊れた。

## 06 微酔の夢

僕の声はいつだって君に届くことはない  
君と僕との距離は、いつまでも縮まらない

廻る廻る廻る

君の声はいつだって僕に届くことはない  
僕と君との距離は、いつまでも縮まらない

堕ちる堕ちる堕ちる

届いてほしい 遠ざかりたい  
届いてほしくない 近づきたい

逆さま逆さま逆さま

想いを声に出したら、手のひらから零れ落ちた

零れ落ちた言葉は、地に染み込んで花になり  
零れ落ちた言葉は、空に浮かんで星になり  
零れ落ちた言葉は、海に溶けて霧散する

僕の想いはカタチを変えてしまったんだよ

だから、僕は唄おう  
想いが伝わるようにと

だから、僕は祈ろう  
いつの日か届くと信じて

だから、僕は願おう  
どうしても、君に　あ　い　た　い

綺麗な唄が聞こえたきがした。

おやすみ。どうか、良い夢を  
そう言って子守唄運んでくれたのは誰だったのか

この唄を“あの子”と“その子”に伝えてあげたかった  
06 微酔の夢

## 07 悪夢

やあやあ、旅人くん。ご機嫌麗しゅう！

やけにフレンドリーにツナギ服の少年が旅人に話しかけます。

返事をしようとしたらもごもごとした音だけが零れ落ちました。

口調と整った容姿に服装が全くチグハグな少年にどう対応して良いのか旅人は焦っているようです。

何だろうこの感じは

何をそう変な顔をしている。別にとって食いはしないぞ。

心底愉快だと言った顔で笑います。

からかわれていると分つていても、苛立たないのはこの少年の雰囲気  
気の所為なのでしょうか。

ああ、何かが引つかかる

最近暇をしていたんだ。今日は旅人くんに出会えて嬉しいよ

もう少しで届きそうなの。

そんなにジッと見られると、ボク穴が開いちゃいそうだよ。

ホンの少しの違和感

ねえ、旅人くん聞いてる？

ああ、この少年は・・・

なあに？ボクの事が知りたいの？

吸い込まれそうな瞳を輝かせ少年は言います。

旅人のココロの動きを読み取ったかのように少年の違和感が増幅していきます。

簡単には教えてあげないよ。だって、簡単に教えたら詰まらないじゃないか

カラカラ、ケラケラ

笑い声が響き渡ります

ボクはいつだって身近な所に隠れているんだから  
見つけ出して見せてよ本当の“ボク”を



ねえ、旅人くん？

耳元で楽しげで甘い声が聞こえた

耳鳴りが鳴り止まない

手遅れになる前に“ボク”を見つけることなんて出来るのかな？

この場で誰も声を発していないことに気付いてしまった

07 悪夢

気付いた時にはもう遅い。だってボクは

悪夢

だ

嘲笑う様に声だけが旅人に届いた

## 08 胡蝶の夢

蝶が踊る

主は実に興味深い。

和装の娘が唄う様に言葉を紡ぎます。

「どうして？と聞いても良いのかな」

何かに急かされるように歩く足を止める事無く旅人は言いました。

蝶が舞う

自分で、分らないのかい？それは実に面白い。

まるで新しい玩具を発見した子供のようで。

「焦らさないで教えて欲しいな。僕は何処にでも居そうな旅人だと思っただけど。」

歩いても歩いても先が見えません。

旅の終わりが見えません。

蝶が煌く

旅人のう。・・・本当に？

えっ？

蝶が揺れる

何の為に、何処に行く？何故旅をする？

あれっ？

何故だろう。答えられない。

蝶が晒う

ヌシ ハイッタイ ナニモノ ナンダイ？

ボク ハ タビビト ジャ ナイノ？

そして蝶が指し示す

妾は一つだけ親切に教えてあげようかの。ほづら、良く見てみ。

そういつて、手に持つ扇で指し示す先には・・・

僕は“僕”という存在に初めて疑問を持った  
気付かないだけでとっくの昔に賽は投げられていたんだよ

今まで片足ずつ別の道を歩いているだなんて思っても見なかった  
08 胡蝶の夢

さあ、存分に悩め。 どちらも正解とも、不正解とも言えは  
しないが どちらを選ぶかは主次第だよ。

夢が現か、そして“今”はどちらに分類される？そう言って蝶は嗤う

漆黒の片翼が羽ばたき、緋の髪が靡きます

愚か者！何を迷う必要があるのだ  
理不尽だと思いながらも、投げ出してしまいたいとココロの片隅が  
言った。

尖った尾が蠢き、深緑の服が翻ります

私の存在は人知の及ぶところになどは無い！  
聞いてはいけないと思いつつも、誘惑が胸を突いた

両手を天へと掲げ、地を見下します

汝の存在などちっぽけで我には悩む必要性が解らん！  
これは自分のココロだと思いつつも、誰かに託してしまいたかった

底の见えない瞳が細まり、形良い唇を歪めます

タビビトよ！決められないのなら、我が下してやろつじゃない

か！！

きつと次が、最後の言の葉

それは神々しくもあり、禍々しくもありました

聞け！我のお告げを

ああ、“僕”が出来上がる

FANTASTIC SYNDROME  
さて、鬼が出るか蛇が出るか。それとも・・・

彼の者の言の葉は高らかに鳴り響く  
09 霊夢

不満などは聞かん！私の決定が全てだ そのちっぽけな存在

に刻み付けろ！！

囚われて捕らわれてもう逃れることなど出来ない

## 10 予知夢

ここは一体何処なのでしょう  
ゆらゆら、ゆらゆら

廻って巡って歩き続ける“誰か”が見えます。  
ゆらゆら、ゆらゆら

まるで夢心地、ふわふわ、ふわふわ、浮かんでいるよう  
酷く臃でもやもや、もやもや、よく見えません。

“誰か”の歩く先に何か落ちているのが見えます。  
小さな、小さな何か。  
遠くて小さすぎて旅人には目を凝らしても良く見えません。

“誰か”は落ちている物を大切そうに拾うと嬉しそうに微笑んで胸  
元に付けました。  
香る、懐かしい甘い香り

「ああ、“僕”がいる」  
唐突に旅人は理解しました。  
あれは、あれは・・・



「何だかとても心地よくて眠いけれど、覚えておくよもう一人の僕」

忘れちゃ駄目だよ。過去の“僕”

霽がかかったように見えていたのが嘘のように晴れ、少し先の“僕”の微笑みが良く見えました。

ありがとう

どういたしまして

はじめまして、未来の“僕”  
もうすぐ会いに行くから、少しだけそこで待っていて

それはきつと恋焦がれた予感

10 予知夢

ありがとう

見つけてくれて

どういたしまして

## 11 旅人の夢

キラキラと星の降る夜に旅人はネガイボシを拾いました。  
巷の噂では、この星は願いを叶えてくれる珍しい物らしい。

色んな色に輝いて、人工では決して創れないであろうとても  
綺麗な星

夢を星に託すのは他力本願かもしれないけれど、願わずには居られ  
ないだろうか？

夢を願うよ

沢山の夢があるけれど、たった僕は一つの夢を決めたんだ。

夢を描くよ

止まる事無く、進んでその先と一緒に描こう。

夢を見るよ

それが、僕の存在する理由にしたいから。

ねえ、次に会えたならちゃんと思いつく事を誓うよ。

ねえ、これからは目を逸らさないと約束するよ。

ねえ、伝わらないなら僕が橋になろう。

ねえ、今度は間違えないで壊してみせるよ。

ねえ、どんなに時間がかかっても本当の姿を見つけ出してみせるよ。  
ねえ、例えそれが間違っても僕は選ばうと思うんだ。  
ねえ、次はこの前言えばよかったお礼が言いたいよ。

ねえ、未来の“僕”。これで良いんだよね？

残像が燻って頭から離れない  
甘い甘い香りに誘われる

星の少女が問いかけます。

貴方の願いは何ですか？

お星様に願いを込めて

どうかあの時の約束を現実にしてください

最後にネガイボシは一際眩しく青く光って消えた  
1 1 旅人の夢

叶えましょう。 貴方がそれを望むのなら

少女の瞳が悲しきで揺れた

## 12 醒めない夢

一人の旅人が森へ行きました。  
きつともう、戻ることは無いのでしょうか。

「こんにちわ。」

旅人は少女の姿を懐かしむように目を細めて笑う。

こんにちわ。

少女は旅人の姿を包み込むように優しく笑う。

少女の口から聞こえた声はしっかりとした重さを含んで

「約束を果たしに君に会いに来たよ」

ようこそ旅人さん。私の森へ

クスクスと少女の声が響きます。

そのガラス細工のような大きな目を細め、確かめるように旅人を見ました。

そして本当に嬉しそうに花のような顔で笑いました。

少女が笑うたびに強くなっている気がする甘い香りに眩暈がします。

お疲れでしょう。旅人さんまずはゆっくり休んでくださいね。

少女の優しい瞳に促されて、旅人はゆっくりと瞳を閉じました。

そして・・・

触れた指先の温かさに旅人は安心して夢へ堕ちていきました。

彼に、青い薔薇を送りましょう。

甘く甘く香る沢山の青い薔薇を

ドルチエに誘われて

手にした“モノ”はむせ返る様な薔薇の匂い

旅人は約束を果たし少女との再会しました

1 2 醒めない夢

旅人さん・・・お帰きなさい

少女の小さな呟きは旅人のもとに確かに届いた。

「ただいま 僕の夢」



## 12 醒めない夢（後書き）

いかがだったでしょうか？Fantastical Syndrome  
コンセプトは夢の擬人化。

私なりの夢達ですが、あえて細かくは描写せず幻想的な雰囲気を出そうとしてみました。

解釈についてはご想像にお任せします。

どうか、お好きに解釈して頂いて貴方なりの夢を想像して頂ければ幸いです。

以下、各々の簡単な夢についての補足説明。

### 青い薔薇の少女の夢

始まりの夢。First Dream

ドルチェ「柔和に」「甘美に」「優しく」に誘われて

青い薔薇「有り得ない」「不可能」「奇跡」

とても“甘美”香りに惹きつけられ迷い込んだ場所はあるはずが無い“有り得ない”場所で普通行く事は“不可能”

そこに居た少女は“柔和”に笑い“優しく”出口を教えてくださいました。

帰ってこれたのはきつと“奇跡”

### 透明な空間の青年の夢

明晰夢

自分で夢であると自覚しながら見ている夢。Lucid Dream  
“夢”を見る人が思い描かないと存在できないんだよ。

現実の中に潜む少女の夢

白昼夢

目覚めている状態で見える現実味を帯びた非現実。 Day Dream  
現実も非現実も紙一重で背中合わせ。

逆さまのあの子の夢

逆夢

事実とは逆さまの夢。実際とは全くの逆。 Dream not c  
ame true  
一番意味不明なのはこの話と次の話の気がします。

本当のあの子の夢

正夢

夢で見たことが現実になると考えられる夢。実際に起こった夢。  
Dream came true  
二人は出会えてないのが現実です。

まどろみの中の夢

微酔の夢

まどろみの中。

前二作からの派生。これは夢の住人じゃありません。子守唄。

逃れられず終わらない夢

悪夢

恐ろしい夢。悪い夢。 Nightmare  
悪夢とは何処からが始まりで何処からが終わりなのか。  
どうか、虚像の彼に惑わされぬよう。

蝶が夢見た夢

胡蝶の夢

夢と現実との境が判然としないたとえ。 You with not  
you

夢か、現実か道は二つ

だけど本当にその二つの道は“夢”と“現実”に繋がっているの  
すか？

摩訶不思議な彼の夢

霊夢

人知を超えた存在によるお告げが現れると言う摩訶不思議な夢。 O  
racle dream  
決められないのなら託してしまいたい

先を知らせる夢

予知夢

未来のことを夢の中で見ること。 Prospect dream  
出合ったのは他でもなく、少し先の自分。

願いを乗せた夢

旅人の夢

寝て見る“夢”では無く希望の方の“夢” My dream  
これも同じく夢の住人ではありません。流れ星

醒めない夢

醒めないの夢 Last Dream  
目覚めることはきつと無い

“夢”？違うよ。これが僕の“現実”

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5763m/>

---

Fantastic Syndrome

2010年10月11日17時15分発行